

「弁償できるのか？」  
六本木最上階で御曹司  
にカントを暴かれたベ  
ルボーイが夜景の前で  
三回中出しされる話

「っ……」

シャンパンの泡が、かすかに弾ける。深夜のスイートルームは静かすぎて、自分の心臓の音すら聞こえそうだった。  
——落ち着け。注ぐだけだ。グラスにシャンパンを注いで、下がるだけ。

研修三週間目。先輩が体調不良で帰った穴を埋めるだけの、たったそれだけの仕事のはずだった。

なのに、ワゴンを押してスイートの扉を潜った瞬間から、指先が言うことを聞かない。

原因は分かっている。

ソファに座っているあの人だ。

ネクタイを緩めた白いシャツ。袖を肘まで捲り上げた腕は筋張っていて、窓際のラップトップの青白い光が、削いだような顎のラインを照らしていた。

レオン・榊。最上階のプレジデンシャルスイートを月単位で借り切っている、外資系ファンドCEOの御曹司。

フロントの女性スタッフが「目が合うだけで心臓止まる」と騒いでいたのを、湊は更衣室で聞いていた。  
——大げさだな、と思っていた。

でも今、灰緑の瞳に射抜かれて、その意味が痛いほど分かった。

冷たい。底のない冷たさ。

人の値踏みをする目。僕の価値を、この数秒で全部査定し  
終えたような――

「っ……」

手が、震えた。

ドン ペリニヨンのロゼが、グラスから溢れる。

琥珀色の液体が白い大理石のテーブルを伝い、椅子の背に  
かけてあったスーツのジャケットに飛び散った。

音のない数秒が、永遠みたいに長い。

「あ……も、申し訳ございませっ……」

「――弁償できるのか？」

低い声だった。怒鳴るのでもない。ただ事実を確認するみ  
たいに。

レオンは立ち上がり、湊の顎を片手で掴んで持ち上げた。  
長い指が顎骨に食い込む。

「ジャケットだけで120万。シャンパンは1本45万。合わせて  
165万。――お前の年収で足りるか？」

「す、すみません……っ、すみませ……」

謝罪の言葉が途切れる。息ができない。首ごと持ち上げら  
れて、爪先立ちになった。

レオンは湊を掴んだまま、窓際まで引きずった。

六本木の夜景が足元に広がる。40階。光の粒が宝石箱をひ  
っくり返したみたいに散らばっていた。

「ここから飛び降りるか、ベッドに上がるか」

レオンの声が、耳のすぐ後ろで響く。

「——好きな方を選べ」

「っ……え……」

意味を理解するのに数秒かかった。理解した瞬間、血の気が引く。

「な……なに、を……」

「泣くなよ」

レオンの指が、湊の蝶ネクタイに触れた。するりと解かれる。

「選べと言っただろう」

「っ、やめ……っ」

シャツのボタンが、上から一つずつ外されていく。レオンの手つきには迷いがない。書類にサインするみたいに、淡々と。

「答えないなら俺が決めてやる」

背中をガラスに押し付けられた。

「ひっ……！♡」

冷たい。40階の夜気を吸い込んだ窓ガラスが、剥き出しの胸に直接触れる。乳首が反射的に硬くなって、尖ったそれがガラスに押し潰された。

レオンの手が背後から回り、ベルトの金具をカチリと外す。  
スラックスが膝まで下ろされた。

「やっ……やめて……っ♡ やめてくだ、さ……」

「何を泣いてるんだ。まだ何もしてない」

下着に指がかかる。黒いボクサーパンツの上から、レオンの掌が股間を撫でた。

——その手が、止まった。

「……へえ」

声色が変わる。さっきまでの氷みtainな冷たさに、別の何かが混じった。

獣が獲物を見つけた時の——熱。

「カントボーイか」

「っ……！♡♡」

知られた。

男性器がない代わりに、そこにあるもの。僕がずっと隠してきた、誰にも見せたことのない——

「ますます弁償できないな」

レオンの息が耳朶にかかる。唇が耳の縁を掠め、舌先がちろりと耳孔を舐めた。

「こっちの方が——高くつくぞ」

ボクサーパンツを引き下ろされた。

「やだっ♡♡ だめっ♡♡ みないで……っ♡♡」

窓ガラスに湊の裸が映っている。六本木のビル群の灯りをバックに、下半身を剥き出しにされた自分。

(やだ……っ♡♡ 見られてる……っ♡♡ ガラスにぜんぶ映ってる……っ♡♡)

レオンの手が、背後から太腿の間に滑り込んだ。

スリ……♡

「んっ♡♡」

乾いた指が、割れ目をなぞる。

ただそれだけ。表面を撫でただけ。なのに身体がびくりと跳ねた。

「っ……♡ やめ……触んな……っ♡♡」

「口の利き方がなっていないな。誰に向かって命令してる？」

スリ……♡ スリ……♡ スリ……♡

指が、ゆっくりと往復する。肉の隙間に爪の先を這わせるだけの、最低限の接触。

なのに。

(な……なんで……っ♡♡ こんな、触られてるうちに入らない……のに……っ♡♡)

じわり、と。

奥から何かが滲み出してくる。

「……ほら。濡れてきてるぞ」

「ちが……っ♡♡ ちがう……っ♡♡」

「こぼしたシャンパンより多いんじゃないか」

レオンの中指が、クリトリスを見つけた。

コリ……♡

「ッ♡♡♡」

爪先で、小さな突起を引っ搔かれる。

コリ……♡ コリ……♡ コリコリコリ……♡♡

「ひっ♡ ひうっ♡♡ やっ♡ やだっ♡♡ そこ……っ♡♡ そこ  
だめ……っ♡♡」

膝が崩れそうになる。窓ガラスに両手をついて、必死で立っていた。

掌の向こうに夜景が広がっている。あの光の一つ一つに人がいて——

(見られてるかもしれない♡♡ こんな格好で、こんな声出して♡♡)

なのに、下半身は正反対の反応を返す。

(やだ……やだ……っ♡♡ なんて……っ♡♡ こんな奴に触られて……僕の身体が……っ♡♡)

男だ。僕は男なのに。

男として生きてきたのに。

この身体だけが——いつも裏切る。

「っ♡♡ あっ♡♡ あうっ♡♡ ンンン……っ♡♡」

クリトリスを捏ねられながら、レオンのもう片方の手が胸に回った。シャツの隙間から滑り込んだ指先が、ガラスに押し潰されていた乳首をつまみ上げる。

「上も下も正直だな。お前の身体、嘘がつけない作りになってる」

「ちが……っ♡♡ ぼ、僕はっ♡♡ 男なのにつ……こんなの……っ♡♡」

「男？」

レオンの指が、割れ目の奥に滑り込んだ。中指の腹が、入り口の肉をぬるりと撫でる。

トロ……♡と溢れた愛液が、指を濡らした。

「ここは——男の身体じゃないだろう」

「っ♡♡♡」

（やめて……っ♡♡ それ言わないで……っ♡♡ 分かってる……分かってるから……っ♡♡）

認めたくなかった。ずっと。

自分の身体に、こんな場所があること。触れば濡れて、刺激すれば快楽を返してくる、この卑猥な器官が自分のものだという事。

指が、入り口に触れた。

「処女か」

「っ……♡♡」



「まあそうだろうな。こんな顔で——誰にも触らせてないだろう」

中指がゆっくりと沈んでいく。

第一関節。

「ンっ♡♡」

第二関節。

「ひっ♡♡ は……あ♡♡」

根元まで。

「うおっ……♡♡♡」

内壁が、きつく指を締めた。初めて異物を受け入れた粘膜が、困惑するみたいに収縮を繰り返す。

レオンはそのまま指を奥にねじ込み、指先で——コッン♡——と、何かを突いた。

「ここだな。お前の一番深いところ」

「おっ♡♡♡ やっ♡♡ そこ……なにっ♡♡ なにかに当たっ……♡♡♡」

子宮口。

自分の身体の中に子宮があるという事実を、指で直接教え込まれている。

（いやだ……っ♡♡ こんな知りたくなかった……っ♡♡ 僕の中に……こんなものがあるなんて……っ♡♡）

指が引き抜かれる。一瞬の空白。

次の瞬間——2本の指がまとめて侵入してきた。

ズチュ……♡ズチュ……♡ズチュ……♡♡

「ひう♡ひうんっ♡♡あ♡あ♡あ♡♡ンンンっ♡♡♡」

水音が響く。深夜のスイートルームに、自分のカントから出ている音が反響している。

「窓の外を見ろ」

「や……っ♡♡」

「命令だ」

顎を掴まれ、正面を向かされた。

ガラスに映る自分の顔——もう、崩れていた。

目尻に涙が溜まり、口が半開きになって、涎が唇の端から糸を引いている。

夜景の光が涙で滲んで、七色に散った。

「っ……♡♡やだ……っ♡♡こんな顔……っ♡♡見たくな……あッ♡♡♡」

指が速くなる。ズチュズチュズチュ♡♡と粘膜が掻き回される音が、もう隠しようがない。

レオンのもう片方の手が、乳首をつまんだまま引っ張り上げる。

「上も下も反応してるな。——自分から腰振ってるの、分かるか」

「っ♡♡♡そんな……っ♡♡振ってな……ッ♡♡」

嘘だった。

腰が——勝手に揺れている。指の動きに合わせて、カントを押し付けるみたいに、腰がくねくねと動いてしまう。

(やだ♡♡ 止まんない♡♡ 腰が勝手に……っ♡♡ こんな奴の指なんかで……っ♡♡ 僕の身体が……おかしくなってる……っ♡♡)

「もう答えは出てるじゃないか」

指の腹が、内壁のある一点を捉えた。

ぐりっ♡♡♡

「びっ♡♡♡」

Gスポット。ざらついた粘膜を、指の腹でグリグリと挟り込まれる。

「あっ♡♡ あっ♡♡ だめっ♡♡ そこっ♡♡ そこ触ったら……っ♡♡ おかしくなるっ♡♡♡」

「おかしくなれ」

グリ♡グリ♡グリグリグリ♡♡♡

「おおおおっ♡♡♡ やだっ♡♡ やだやだやだっ♡♡♡ なんか出るっ♡♡ なんか出ちゃ——♡♡♡」

窓ガラスに額を押し付けたまま、湊の身体が大きく仰け反った。

プシュッ……♡♡